英国春秋

２０１４年　春号
ＩＳＳＵＥ　Ｎｏ．２４
発行　英国日本人会

はじめに

今回、春号特集、「国際結婚：私のケース」を組みました。集まった作品は決して多くはありませんでしたが、執筆者の結婚に対しての「生の声が聞こえた」という点では企画した甲斐があったというところです。

「・・・毛唐との結婚は許せない・・・」なんて懐かしい差別語が出てきて、思わず頬をほころばせました。「未来の大学教授夫人の座を蹴るなんて、何て勿体ないことを・・・」とも思ったりしました。また、結婚当初目玉焼きしか出来なかった方が、今お料理教室を開いておられるとも聞き、時の流れを痛感しました。そして、最後に最高の賛辞、日本の花嫁は「花形輸出産業」だそうです。ただ彼女らがハイ・クオリティとハイ・パフォーマンス云々はよいのですが、ロー・メインテナンス…云々という箇所が少々気になりました。おそらく、結婚記念日にも宝石をねだらず、金曜日の夜ごとのディナー＆ダンスもせがまないからコストがかからない…と解釈すればよいのでしょうか。そして筆者は、日本の男性を「会社人間・働き蜂」として輸出品目から除外しておられますが、それは少し違うような気がします。給料は全て妻に渡し、家事いっさいに口を挟まず、グチを言わずに黙ってサッポロ・ビールを飲む高性能の男性が、日本以外どこの国にいるでしょうか。この真実を知ればヨーロッパの女性がどっと押し寄せる事間違いないと信じています。男性の皆様も、もっと積極的にそのチャーム・ポイントをアッピールして、日本国輸出産業に貢献していただきたいと思うばかりです。

春爛漫、気分爽快、編集作業も調子よくはかどり『英国春秋』春号、第２４号が完成しました。原稿をお送りいただいた会員の皆様、そして特別寄稿いただいたゲスト・ライターの方々、大変ありがとうございました。いつもの言葉になりますが、執筆者なしには『英国春秋』も存在し得ません。今後とも宜しくご支援いただきますようにお願いいたします。

特別寄稿

原洋一郎氏　（日本クラブ診療所・日本内科認定医・専門医）

松居竜五氏　（龍谷大学国際文化学部教授・南方熊楠顕彰会理事）　　アイウエオ順

＊＊＊＊＊　　も　　く　　じ　　＊＊＊＊＊

特集『国際結婚：私のケース』

私の結婚	トロロープ礼子	３―４
人生劇場	クーパー矩子	４
半世紀を顧みて	矢嶋蓉子	５
日本女性は花形輸出産業!!⁇	加藤節雄	６
味三昧　-父の味、母の味、　母のラーメン-	ビドル恵	７－９
ワインとぶらり一人旅	原洋一郎	１０―１１
香りの世界	小川のり子	１２―１３
南方熊楠のロンドン生活	松居竜五	１４―１６
映画のエキストラ	早乙女健之	１６―１７
英国春秋俳壇	俳句同好会	１８
“　　かぼちゃ	エリオットつや子	１９
着物に魅せられて	佐藤智子	２０
ヒマワリ	古沢いくこ	２１
シャモニー・モンブランでのトレッキング	岡村光雄	２２―２４
小学校の頃の懐かしい思い出	田村陽子	２４－２５
ソチ２０１４オリンピックボランテイァ奮闘記	西川千春	２６－２８
ドバイの印象　“共生の砂漠のオアシス”	バロー典子	２９－３１
英国春秋あれこれ		３１

『英国春秋』春号特集

「国際結婚」

私の結婚

トロロープ　礼子

看護婦学校時代から長い寮生活を続けていると、たまらなく孤独で淋しい生活の連続でした。病院で働いていれば出会うのは患者と医者で、特に医者は私たち看護婦など目もくれず又相手にしてもらおうとは思いませんでした。このまま横浜の外人病院で働き一生を終わるかもしれないと思うと情けなく、こんな生活からなんとか脱出しなければと考えておりました。

東京医科歯科大学の歯学部で働いていた時は私自身もっと若かったし、大学生にちやほやされてダンスを教えてもらい大学祭ではパーテーに招かれ楽しんでおりました。そのころ九州で知り会った友人のお兄さんで理科系のＨに出会い二度も求婚されました。しかし彼と友達として付き合うのはたのしかったのですが、急に求婚されてみると緊張してしまいました。第一彼はあまりにも優秀で立派すぎたのです。野育ちの私はこの人の妻になり未来の大学教授婦人になるにはふさわしくなく、あまりにも責任重大だと思いことわりました。学友に言われました。礼子さんはどうしてＨさんを断ったのかと、貴女に取ってもったいない縁談なのに。そして愛情は結婚してからはじめて沸いてくるものですよと。やはり縁がなかったと思います。

その後自分で選んだ人と付き合っても長続きする男性とめぐり合うことができませんでした。再び横浜の外人病院で働いたときにもどりますが、こんなところで結婚をあきらめてカナダに移民しようと決心しました。アメリカで１年学生として勉強しながらナーセスエイドとして働いた経験がみとめられたのだと思います。すぐビザを取るようにカナダ大使館から連絡がありました。ノヴァスコシアでもどこでも良い私は一生看護婦として働くつもりでした。そのために旅費をかせぐ為３ヶ月位バーで働き始め、最初の夜現れた客が現在の主人でした。元ロイヤルネイビイの出身で、出会つたときはニュージーランドの商船の船乗りでした。彼との出会いが私の人生に180度の角度で回転し変わってしまったのです。彼と話しているだけでも楽しいし、リラックスした雰囲気で私の好みの男性でしたので彼が再びニュージーランドへ仕事でかえる前に交際しました。彼に学歴があるとかお金があるのではなく、私と同様に貧しく気やすい人で、やはりネイビイ時代に世界中を回った経験で性格がおおらかな人でした。私の目的がカナダに移民する予定だと聞き、私を引き止めたかったのでしょう。カナダへ行かないでニュージーランドかイギリスに住みたいと思いませんか?と手紙で聞いておりましたので、一体それはプロポーズですか?と手紙で聞いたら、そうだと言うのでその時点で二人は結婚することを決めてしまいました。 勿論私の住みたい国はイギリスだとつたえました。

このようなスピードデートとスピード結婚で二人はむすばれたのです。 1965年の日本で国際結婚は少なかつたのでしょうか、横浜のカトリック教会で式を挙げたのは、リーガルではないと言われ、イギリス大使館で再び式をあげたのでしたが、横浜の役場では結婚を日本で認めるためには草書で届けてほしいと命令され、下手な筆で何回も書きなおしたことを覚えております。 人生はやはリギャンブルで運が当たることもあり、またはずれることもあると思います。私達の結婚は50年近く続いたことは成功だったと感謝しております。彼自身自分の好む船乗りの仕事をは

なれ、私のためにロンドンに帰ってきてくれたのです。貧乏でしたが、3 人の子供が生まれたことは最大の恵みだといつも感謝しております。初めて自分の巣を作れたのですから。子供の性格は５歳までの母親の教育できまると聞いておりましたので、子供たちが５歳になるまで私のすべての時間と愛情をそそぎ育てました。子育の喜びは最高にすばらしいとおもいます。子供達の成長してゆく日々の変化をながめながら私達はなんと幸せかとおもいました。しかし長い夫婦の生活が常に平和ではありませんでした。夫婦喧嘩で一度私はランザロッテに旅行して、もう家へは帰らぬと思つたこともありました。懐に５ポンド残し、パスポートもなくしてガトウィク飛行場に主人がもしむかえにこなかったらどうしてルートンまで帰れたか疑問でした。
こんな半分気違いじみた日本人の妻を持った主人に大変苦労させたとおもいます。やはり彼は普通の家庭に育ったひとで、やさしく子供達にも良い父親です。
どうもありがとうといつも感謝しております。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

人生劇場

クーパー　矩　子

「三人も子供がいて離婚するような毛唐となぞ断じて許さん!」と父は母に言ったそうです。当時六十過ぎの明治生まれで、私を結婚しない娘と思いこんでいたのでショックは大きかったのでしょう。こういう父と知ってましたから私も式をあげる直前に通知し、引きとめられないように謀ったのです。

私の当時の雇主が労働許可証を再申請しなかった為、国外追放の身となってしまいました。それ迄一年ほど彼と暮らしておりましたから、いずれは結婚する事になるかとは考えていましたがこうなっては決断の時です。

彼の前の妻とののびのびになっていた離婚を弁護士を替えることで成立させて、晴れて私達は式にこぎつけました。一緒に住み暮らしてお互いを何とか分かり合えたつもりでしたが、まるで青写真と違った生活がやってきたのです。

ケントに家を買って移ったら二年間の失職から始まり、計十二回の引越とそれにかかわる転職、彼の子供三人の結婚、その内二人の離婚、心臓手術を含む数え切れぬ入院（病院も呆れるほど）という訳で、最初の十年はハプニングの連続で疾風のように過ぎました。こんな大変な暮しから脱れようと思わなかった訳ではありませんが、帰国を決意すると同時に彼は具合が悪くなって入院する、全くの特技です。病人からは逃げて行かないと信じているのかも?その繰り返しで現在に至っているのであります。

私の運勢は日本式の占いでも西洋の星占いにしても「勝負運」というのだそうです。一か八かどの目が出るかやって見るしかないとすれば何が起こるか分からないし、もう何が起きても驚かないのが生きる姿勢になったようです。

一年続くかどうかと危ぶまれた暮しも四十二年経ち、その内半世紀が来てしまいます。孫のうち二人に子供が授かり、曾祖父母ともなるといやでも歳月の足跡を意識させられる比頃でもあるのです。

ゆく春や人生劇場幕近し

半世紀を顧みて

矢嶋蓉子

結婚後５０年を得て私は当初自慢ではなく,目玉焼とポテトサラダ丈の料理歴でした。義母の言葉に「ポテトサラダが出来れば立派ですよ」と云われ外食の際、喰べたものを作ってみて、なるべく食器も同じ物を入手しての行動でした。
娘達の成長期、バースディパーテイもたのしんで催しました。其の時代は専業主婦が一つのステータスでもあり、子供と一緒になってピアノもレッスンに始まり５年でエレクトーンに、指導者の資格もとりました。また洋画（油）を有名な画家に指導を受けて東京都の美術館に出品を繰返していました（８０号３点づつ)。車の屋根上に荷作りしたキャンバスを上野の美術館に運んだものです。

其の後バンコックに夫の転勤に二人の娘も同伴しました。(1973 年)その頃は連日親睦会が催され、華やかに着飾り出席したものです。会場では日本人カップルも少なく、にたにた笑うばかり悲しい話題の処では対処できなかったものです。キング、クイーンのバンコックバンクの代表のパーテイにも出席したものです。(映画「王様と私」の宴会の場面さながら中々味わえないものでした。) 又次女は日本で習得したトランペットの独奏会等を発表したものです。３年間の任期を終って日本に帰国、娘達はそれぞれ希望の学校に、私は連日趣味三昧でした。(エレクトーン、油絵、ヨガ、水泳）６０才になり娘一家、孫達の学校送迎をとの理由を受けて日本を後にしました。

それから又英語の勉強にとアダルトスクールに通いました。日本人は６年間英語を勉強しているものと思われ、私には旧制女学校も一年の一学期のみの習得で、所謂「ジス・イズ・ア・ペン」を習った位で、敵国語で廃止との理由で勉強しないのでした。学徒動員、焼跡整理で卒業、三井銀行に入行したのです。来英１０年間は必死で勉強したものです。然し基礎が出来ていないのでそれは苦しい連日でした。今でもまだまだブロークンイングリッシュですが、主人云わく、「当地英国人は（友人達）頭が良いね。お前の英語を理解してくれるから」と云っていました。
そんな日々2012 年 4 月、56 年間共に過ごした夫を亡くしました。祭壇に飾られた遺影から笑みをたたえて見守ってくれています。今日何不自由なく娘一家との同居で過ごしています。この際考える事は「あと何年でしょう？そして喰べる事、作る事が好きな事」などで、これは私にとってのボケ予防対策の一環と思っています。たのしい一日一時をと願うばかりです。ここに５０年の歩みを記しましたのでよろしくご判読ください。

めずらしく初夢をみました。新年をしたためました。

亡き夫（つま）の笑み初夢に顔を出し　　孫娘クリスマスデイナーに腕振う

お屠蘇重母親の姿思い出し　　初笑いハッピ姿の愛犬に　（友人の犬）

新春を愛猫と共にくつろぎて

愛猫を膝にかかえし紅白を

正月も孫達は来ぬ卓淋し

百才まであと何年のプランかな

日本女性は花形輸出産業!!??

加藤節雄

取材でスコットランドのハイランド地方にあるコーダー城を訪れたことがあるが、いろいろと案内をしてくれたガイド嬢は日本人女性だった。コーンウォールのセント・アイブスと言えばイギリスのアーティスト・コロニーとして有名だが、そこにあるテート・ギャラリーの案内役にも日本人女性がいた。イングランドの南の海岸町イーストボーンには93 歳の日本人女性をはじめ数人の日本女性が住んでいる。

デボンのダートムーア国立公園の中にあるモアトンハムステッドと言う小さな町に知り合いの日本人陶芸家(こちらは男性)が住んでいるが、彼が日本の書籍に飢えていると言うので、ＪＡのバザーの残りの日本書籍を 100 冊以上届けた。彼はもちろん大喜びだったが、全部は読み切れないので、近くの町ニュートン・アボットにある日本女性グループに寄付すると言う。そこで彼の案内で世話役を務める日本女性を訪れた。ニュートン・アボットは人口 23000 人の町だが、10 人以上の日本女性が住んでおり、常に交流をしていると言う。

驚いたことに、この付近だけでも、トトネスと言う町には日本人女性が 20 人以上もいて、日本からアーティストや工芸作家を呼んで展覧会やワークショップを開いたり、毎週日曜日に開かれるマーケットには露店を出して日本食を売ったりしている人もいるそうだ。もっと小さな町であるバビー・トレーシーには指圧を職業とする日本女性も住んでいるという。

ロンドンにいれば日本人はいくらでもいるし、日本レストランをはじめ食料品店や書店もあるし、日本人学校や塾もある。日本人による音楽会や展覧会も常にどこかで開催されていて、日本人に会うのは珍しくもないし、日常茶飯事として「日本」が存在する。しかし、ロンドンを離れるとちょっと事情が異なる。

私は仕事柄かなりイギリスの地方を訪れる機会が多いが、いつも驚かされたり、感銘を受けることがある。それはスコットランドに行っても、ウエールズに行ってもウエスト・カントリーに行っても、ヨークシャー、マンチェスター、リバプール、バーミンガム、サフォーク、ノーフォーク、とにかくイギリス中どこへ行っても日本女性が住んでいるということである。ほとんどの人がイギリス人男性と結婚して住んでいるのだが、ただ単に主婦をしているわけではなく、積極的に土地の人に交じり、仕事に就いている人が多い。

日本大使館の在留届の数字をみると、イギリスにおける 2012 年の女性永住者登録数は

11922 人となっている。前年同時期に比べて 633 人も増えている。このうちの大部分の人たちは英国籍の男性と結婚して永住権を取得した人たちと推測される。この傾向はここ数年変わっていない。これは何もイギリスだけで起こっている現象ではあるまい。アメリカでも、アジアでも、そして他のヨーロッパ諸国でも現地人男性と結婚した日本女性が増えているに違いない。とすると、大変な数の日本女性が海外へ出ていることになる。

日本女性のグローバル化を喜ぶべきか、頭脳流出を嘆くべきか、悩むところだが、外国での日本女性の人気が高いことだけは事実である。見方を変えれば日本女性はトヨタやソニーに並ぶ花形輸出産業とでも言えそうである。世界に冠たる日本製品は一般的にハイ・クオリティーでハイ・パーフォーマンス、そしてロー・メンテナンスを特長としている。日本女性をそのまま製品と比較することは出来ないけれど、外国に住む日本女性の溌剌と活躍する姿を見るたびに、「さもありなん」という感を強くする。

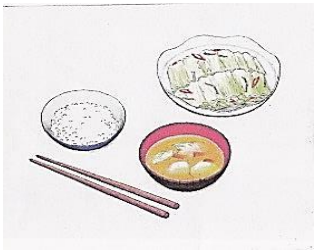
振り返って、わが日本人男性を見てみると、ほとんどが日本的な会社人間で、働き蜂よろしく仕事に追いまくられている。外国ではあまり通用しそうにないライフスタイルで、輸出どころか、これでは国内でも売れそうもない。そんなダメ人間を見捨てた日本女性が国外に＜販路？＞を求めたとしても不思議とは言えまい。

味三昧

ビドル　恵

父の味．母の味

私の子供の頃、昭和３０年代は育った足寄（アショロ）町全体が貧しかったが、我が家は度外れていた。



カット：めぐみ

暮らしていたのは、たいがい６帖の茶の間に４帖半の寝間が付いた棟割の借家で、流しとトイレは共同、トイレに至っては厳寒の北海道だったにも関わらず外。

父はめったに帰って来ず、家には金も物も無く、母一人の働きに子供３人が寄りかかっていたから、その日に食べる物にも事欠く時のある暮らしであった。

子供に食わせるために母は一年中を働き通したが、どれ程忙しいさ中でも朝飯には必ず炊き立ての御飯を食べさせてくれた。

炊飯器などという電化製品は夢の夢、母は薪ストーブにおかまを載せて御飯を炊いた。

麦の混じっていない“白い御飯”の時は、それだけでご馳走だった。煮干のダシで、ジャガイモと玉ねぎとか、ニンジンの入った味噌汁。季節と漬かり具合の順に応じて変わる、鉢に山盛りの漬物がおかずだった。

山の中の農家で生まれ育った母は、毎年秋口になると大根や白菜、蕪といった旬の野菜を借金してでも大量に買い込み、大樽に沢庵をはじめとして、白菜漬け、身欠きニシン漬け、粕漬け、などと幾つも仕込んで冬に備えた。食物の不足する北海道の百姓家が身をもって覚えた越冬必需品だ。冬の前にこれを済ませないことには、母は不安で仕方が無かった。

こうした母の漬物の中で、私の好物は刻んだコブとたかの爪を散らして漬けた白菜。それも漬かりの浅いのより、よく漬かってほのかに酸味を持った方がよい。根もとの方のシャキシャキしたところもいいけれど、しんなりした葉っぱの方が好き。塩味がよく滲みて醤油もいらない。これを広げて海苔のように熱々の御飯をくるんで口に投じると、程よい酸味と塩味が、御飯の甘さと交じり合って絶妙な美味しさだった。

「貧乏で何も食べさせてやれない。」と母はよく泣いたものだったけれど、私たち兄弟３人で「のりまきみたい!」とはしゃぎ合って食べた朝飯は、私たちも、それを眺める母も幸せだった。

そんな赤貧暮らしの中でも真冬になると、我が家ではよく三平汁を拵えた。今思うとそれは冬には家に居る父が、母に教えた料理であった。浜益（ハママス）という漁師村に育った父は魚の味にうるさく、塩引きしていない生の鮭などは、ホッチャレ（放ってしまえの意味か?）とか、木のクズを噛んでいるようだと言って嫌がったが、塩で真っ白になったシャケのアラ（頭や砂ズリのところ）で作った三平汁は大好物だった。

ジャガイモと大根を水から煮て、ひと煮立ちひたらブツ切りの塩ジャケのアラを鍋にほうり込む。浮かんできたアクをすくい取り、具が煮えた頃合いを見計らって、おろした生姜や酒粕で味を整える。塩ジャケからかなりの塩分が出るので、塩味を足す必要は殆ど無い。余裕のある時はそこに、ニンジンやら白菜やらを入れたりして具沢山にすれば、おかずもいらない。

本来、三平汁はニシンをヌカ漬けにし、魚体が乳酸発酵して独特な芳香風味と防腐力がでたものを使うのだが、小骨の多いニシンとこの臭みが子供達には辛かろうという心づかいで、塩ジャケにしたのではないかと思う。

正しくは“三平汁もどき”である。（ちなみに、塩ジャケを甘塩のに替え、春菊やしいたけ等のシャレた野菜を加えて、味噌と酒粕仕立てにすれば“石狩鍋”になる。）

とはいえ、茶の間の一角に据えた薪ストーブの上で作られた三平汁は、シャケの塩味と酒粕の甘味、それに野菜の旨味が一体となって、鍋を囲む家族全員が、腹も心も暖まる一品であった。

父は社交好きで家にはめったに居ず、見栄っ張りの上に、仕事は気分しだいという、どうにもしようがない男だったが、母はそんな父に教わった浜料理と、母の実家の漬物の味を私たち子供に伝えた。

嫁さんの味に慣らされてしまった兄は別として、魚料理は私、漬物は姉が受け継いだ。

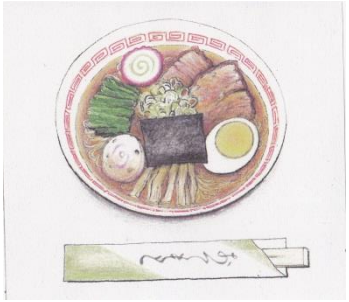
姉の漬物の中では、身欠きニシンの替わりに塩ジャケを使った大根漬けが、母を越えるのでは、と思わせるほどに美味しい。（ブツ切りの大根と短冊に切ったニンジン、そこに生の塩ジャケのそぎ切りをさらに手でちぎって入れ、刻んだコブと米麹で漬ける寒冷地ならではのもの。）

英国に住む私の方は、この父と母の味を伝えたい子供ができなかったし、漬物は気候的にも一夜漬けのような浅漬程度しか使われない。日本食好きとはいえ、英国人の夫は白菜嫌い、魚は焼くか、衣をつけた天プラかフライだけでは、一緒に楽しむ事もできない。

白菜の漬物と三平汁は、夫の留守の間にひとりで、今は亡き両親を思って食べる、せつない味のする物になってしまった。

母のラーメン

私が小学校に上がった頃、赤貧暮らしから脱け出すために父母は奮闘して、足寄（アショロ）町の役場に近い表通りの小さな店を借り食堂を始めた。できますものは、ラーメン、チャーハン、親子丼の類、店の名もその頃人気のあったテレビ番組から“まんぷく食堂”いたって庶民的な店であった。



カット：めぐみ

仕入れ先との交渉とか、ラーメンのスープの取り方とか、始めの頃こそ父もめずらしさ勝って調理場に立ったりしたが、持ち前のあきっぽい性格のこと、すぐにまた出たり入ったりの元の木阿弥。結局は、調理、お運び、時には役場から来る注文の出前まで、母ひとりで切り盛りするはめになったので、あい変わらず母ひとりの稼ぎに子供３人、時には父まで寄りかかっていたのは同じだった。

朝飯は食べさせてくれたが、働きに出ていた頃とは違い、店は夏場なら夜の１０時、客足の少ない冬でも８時まで開けていたので、母の拵えた晩飯が食べられる事は少なくなった。

母の手が空いていれば、何か手早くおかずを拵えてくれる時もあったが、たいがいは水屋の中から作り置きしてあるおかずを見つけ出し、朝の残りの冷や御飯に、温め直しの味噌汁を調理場の脇の茶の間に座って、子供たちだけでそそくさと済ませた。

ところがどうしたものか、極たまにではあるが、店で売り物を食べさせてくれる事があった。

「いつも何んにもしてやれ無くてかわいそうだから、今日は好きな物を作ってあげる。何が食べたい?」と母に聞かれる。私たちは胸弾ませて壁の“おしながき”を眺め、兄はたいてい親子丼か豚丼（豚肉を照り焼きにして御飯に載せたもの）で、姉の好物はチャーハン、そして私は醤油ラーメンを頼むのであった。母に拵えて貰ったという思い入れと、あの頃は常にお腹をすかしていたので、そうして食べた温かい晩飯は、私たちにとってはものすごいご馳走であった。

調理場のスープの大鍋にはトリガラや豚の色々な部分、長ネギやニン

ジン、ニンニクといった野菜がじっくりと煮つめられており、今までにかいだ事の無い美味そうな匂いがした。豚の鼻先がプカリと浮いていたりすると気持ち悪いと思うより、どんな味がするのだろうかと生唾を飲み込んだものだった。よほど飢えていたんだろうなあ、あの頃は。

先ず煮立った大量の湯に麺をほぐし入れる。丼にラード少々とチャーシューを作って旨味のついた醤油を、小さなひしゃくでピャッとすくって入れ、それを大きいひしゃく一杯のスープで割る。程よくゆで上がった麺を箸と浅い手ザルを使って器用にすくい上げ、チャッチャッと湯を切って丼のスープに入れる。さらにその麺を箸で返すというか、スープに馴染ませるというか、軽く引き上げて再び均すようにスープに沈める。そして手際よく具を載せていく。ずらした２枚のチャーシュー（チャーシュー麺なら５枚）、シナチク数本、刻んだネギ、ゆでたほうれん草の緑、半切りのゆで卵、赤いのの字のナルトと麩、そして真っ黒い海苔が一枚、と見た目にも美しい北海道の正統派、醤油ラーメンができ上がる。（あの頃はまだ味噌ラーメンは流行っていなかった）母の手捌きは実に見事で、私は見あきる事が無かった。

私がまだ小さかった頃、母は私を背負って繁盛していたラーメン屋さんの調理場で働いていたそうで、その時に美味しいラーメン作りのノウハウを覚えたのだとか、子のひいき目を差し引いても母の作ったラーメンは美味しかった。初めて食べた時にはこの世にこんな美味しい物があったのか、と思った程のショックだった。

だからある時、兄がものめずらしさに買ってきたチキンラーメン（当時２０円）は、わが兄妹にはまずくて食えたものでは無かった。

母の店は、父の“捕らぬ狸の皮算用”のおかげで借金が嵩み、営業し続けられずに私が中学校に上がる前には閉めてしまった。以来母の作ったラーメンを口にする事は二度と無く４５年近く経った。東京で暮らした頃は美味しいラーメンも食べたし、味噌ラーメンも大好きだが、母のラーメンを彷彿とさせるような味には尽いぞ出合えなかった。

そして３年前にはその母も亡くしたので、もう絶対に味わう事のでき無い幻のラーメンとなってしまった。

英国人の夫と出合って渡英したのが８６年。住んだのは夫の出身地に近いイギリス中部のバーミンガム市。とはいえ日本食は元より、黄緑野菜不足、新鮮な魚も無い暮らしを強いられた。意を決してロンドンまで出れば日本食品も買えたし、日本食を出す店もあったけれど、高級な料理屋とか、そば、うどんが主で、ラーメン屋は少ない上に出てくるものはラーメンもどき。中華街の拉麺（ラオメン）は、日本のラーメンとはまったく異なる物だったので、私のラーメンに対する欲求不満は募るばかり。

斯くして嫌っていたインスタントで凌ぐより他なく、ラーメンは日本へ里帰りした時の楽しみとなってしまった。

幸いにして今は、ロンドンにも美味しいラーメンを出す店ができたし、私の方も南部に引っ越したのでロンドンも近くなった。しかし、血圧や肥り過ぎを気にする中高年になったこの頃、月に一度と控えてはいるが、亡き母と幻になってしまった母のラーメンに対する郷愁を追い求め、ひいきの店に入って啜るラーメンの美味しさは、どうにも堪えがたい。

ワインとマラソンぶらり一人旅

～メドックマラソン完走記～

原　洋一郎

私は 2011 年 5 月にロンドンに赴任し、日本クラブ診療所で診療をはじめました。　働きはじめて間もない 5 月中旬に、1 人の男性が「マラソンに出るための診断書を書いて欲しい」と受診されました。　私もランナーの端くれですが、日本国内の大会にしか参加したことがなかったため、最初は事情がよく分かりませんでした。　話しを聞くと、出場するのは 9 月のメッドクマラソンで、出場者全員に診断書の提出が義務づけられているとのこと。　ただしこのマラソン、仮装してワインを飲みながら走るのだとか...　はて、酒を飲みながら走るマラソン大会に医者の診断書が必要ということは、「Mr.某はどんなに泥酔しても倒れず走ることが可能です」　とでも記載すればよいのかと悩みましたが、どうも形式的なもののようで、私のサインと診療所のハンコのみで一件落着しました。 その時初めてメッドクマラソンの存在を知った私は俄然興味が沸き、帰任するまでに一度は走らねばと思い続け、2 年後 2013 年 9 月の大会に出ることができました。

大会 2 日前の朝 4 時半、3 歳の娘と身重の妻をほったらかしにして、一人家を出ます。ガトウィック空港から向かう先は何故かバルセロナ。UK からこのマラソンに参加する物好きがよほど多いのか、大会前後のボルドー便の料金が高くて癪に障るので、直接ボルドーに入らずドライブを楽しむことにしました。　バルセロナでレンタカーを借りて北上し、ピレネー山中の小国アンドラで一泊。私の訪問国リストに 1 カ国追加した後、翌日一路ボルドーへ。　大会前日にゼッケンを受け取る必要があるため、ボルドー郊外の環状道路から一般道に降りて北に約 40km、会場のある Pauillac（ポイヤック）に向かいます。　途中には、Margaux（マルゴー）など馴染みのある名前の村があり、周囲にブドウ畑も広がっていて気分が高まります。　会場に着くと、周りの空き地にはキャンピングカーで来ている人や、テントを張って陣取っている連中が大勢いて、前の晩から飲み続けるぞという気迫が伝わってきました。

私はボルドー郊外のホテルに宿泊し、当日は送迎バスで会場入りしました。　車を使うと帰りが飲酒運転になるので要注意です。　スタートは Pauillac の街の東側、ジロンド川沿いの直線道路ですが、色とりどりのコスチュームに身を包んだランナーがひしめき、雰囲気はまるでカーニバル会場です。　スパイダーマンやスーパーマンは、悪者が何人いても退治してくれそうな程大勢いますし、立っていることさえ難しそうな巨大なかぶり物を付けた人、愛くるしいお尻とスネ毛を出したバニーガールのおじさんなど、皆さん真面目に走る気など全く感じさせません。　日本からも、恐らくこの大会が目的と思われるツアーの団体が何組か来ていました。その中の 5、6 人の女性の集団は、外見から推察される御年齢と、身に着けている可愛いアニメキャラの衣装とのアンバランスが絶妙で、外国人男性にモテモテです。

スタートは午前 9 時。　8500 人の下層集団、失礼！仮装集団がブドウ畑へ向けて走り始めます。　フルマラソンなのでコース全長は 42.195km ですが、通常のマラソンと異なり、車道だけではなくブドウ畑の中の細い未舗装の路も走ります。　主催者が紹介しているシャトーは 60 カ所、そのうち 21 のシャトーと、他 2 カ所でワインが振る舞われます。　道中の主なシャトーは、前半の Pauillac 南側は、4km 地点に Ch.Batailley（バタイエ）、St.Jurien（サンジュリアン）に入り 9km 地点にサントリーが所有する Ch.Lagrange（ラグランジュ）、14km 地点に Ch.Beychevelle（ベイシェヴェル）、再び Pauillac に戻り 18km 付近には Ch.Latour（ラトゥール）、Ch.Pichon Longueville Comtesse de Lalande（ピション・ロングウィル・コンテス・ド・ラランド）、Ch.Pichon Longueville Baron（ピション・ロングウィル・バロン）と極上 1 、2 級シャトーが並び、ちょうど 20km 地点が Ch.Lynch Bages（ランシュ・バージュ）です。後半は Pauillac

の北側、 24km 地点に Ch.Pontet-Canet（ポン・カネ）、そして 26km 付近は Ch.Mouton Rothschild（ムートン・ロートシルト）、Ch.Lafite Rothschild（ラフィット・ロートシルト）と大御所が続き、St.Estephe（サンテステフ）に入ってからは 28km に Ch.Cos d’Estournel（コス・デストゥルネル）、33～34km 辺りでハートのラベルで有名な Ch.Calon Segur（カロン・セギュール）の南側をかすめて、最後は 38km 地点の Ch.Montrose（モンローズ）です。 にわかワイン好きの私でさえ聞いた事のあるシャトーが目白押しですので、ワイン通の方は感涙に咽びながら走ったことでしょう。 さすがに数千人ものクレイジーなランナーに出すワインは売り物とは別だと思いますが、各々のシャトーの味の違いは良く分かりました。 中には正式なラベルの付いたボトルの中身を、大きめのワイングラスで出してくれる太っ腹のシャトーもあり、ついつい飲み過ぎてしまいます。 そのためかブドウ畑の真ん中で放尿しているランナーを何人も見かけました。管理者から苦情が出るのではと心配しましたが、考えてみればそれが肥やしとなって将来芳醇なブドウを育み、再びランナーの喉を潤すのですから悪いことではありません。

このマラソン大会は今回で 29 回目と、コンセプトが阿呆な割には比較的歴史があります。 周りの住民も慣れたもので、パラソルと椅子をブドウ畑の脇に並べて、ワインを片手に仮装ランナーを見ながらピクニックをしている家族がチラホラいて、のんびりとした雰囲気です。 さらに、沿道の所々で演奏されている音楽や、酔っ払ったランナーが集団で叫ぶ音痴な歌が耳に心地良く、走るペースはどんどん落ちます。

終盤 38km 過ぎにジロンド川沿いの直線コースに出てからはコース料理が始まります。前菜は生牡蠣と白ワイン。 通常のマラソンのエイドには有り得ない組み合わせですが、レモンの酸味と牡蠣の旨味、そしてここだけ唯一白ワインが飲めるということもあって疲れが癒されます。 1km ほど進むとメインのお肉。 さすがに凝った料理はできないらしくシンプルな牛肉のステーキですが、肉はその場で焼いており、それを地元のおばちゃん達が黙々と一口サイズに切ってくれています。 メインの後にチーズとブドウをつまめるエイドがあり、このあたりがフランスの粋を感じさせます。 最後はデザートのアイスクリーム。周りにチョコレートがコーティングしてあるスティックアイスで、思わず 2 本食べました。 そして 42.195km を走り終えてゴール。 タイムは 5 時間 10 分で、もちろん自己最遅です。 しかし驚いたことに参加者全体ではちょうど上位 1/3 と意外に好成績でした。 制限時間は 6 時間半ですから、後ろ 2/3 のランナーが残り 1 時間 20 分で全員ゴール出来たとは到底思えません。 まあ、マラソン大会とはいえ、仮装とワインを楽しみたい人達が集まって、何故か分からないけど走っているという程度ですから、寧ろできるだけ長くコース上に滞在して、できるだけ多くのワインを飲んだランナーが勝ちなのかもしれません。 ちなみに優勝商品は「自分の体重分のワイン」だったそうです。

翌日、ボルドーを離れ、スペイン北東部のバスク地方へ車を走らせました。 前日にフルマラソンを走ったわりには、思ったほど疲労感や筋肉痛を感じません。 ムム、これはアルコールの血管拡張作用により、運動中の骨格筋に十分血液と酸素が供給され、嫌気性解糖が起こらず乳酸などの疲労物質が蓄積しなかったためか？ と、都合のよいアルコールの効能を思いつき、その夜は美食の街として有名なサンセバスチャンで、更に体の疲れを癒すべくバール巡りを楽しみました。 もちろん翌朝はどっと疲れが出て二日酔いです。 昼前にようやくホテルをチェックアウトして、ピカソの絵で有名なゲルニカに寄り、ビルバオでもう一泊。 夜、閉店間際のレストランで料理とグラスワインを注文したところ、店員のおじさんが 3/4 ほど残ったワインボトルを持ってきて、「全部飲んでいいよ」と言うので、この日も予定外の深酒になってしまいました。 そのためか翌日に行ったグッゲンハイム美術館の近代アートは、私の網膜を素通りしただけで殆ど記憶に残らないまま午後の便で帰英しました。

5 泊 6 日と短くも、総走行距離は車で 1500km、自分の足で 42km の、長い酔いどれの旅となりました。

香りの世界

小川　のり子

言葉には文字で表される以上のものが潜み、時には映像、音、そしてにおいなどが加わって、より意味深い物になったりもする。
今、我が家では沈丁花の真っ盛りなので、“芳香”と言えばこの花の香りがかすかに漂って来るようである。時にはその“芳香”がジャスミンの香りで代表され、そしてくちなしの花にもなる。ラベンダーにもなるし、また菊の花にもと季節によって変わったりする。

まだ花の少ない春先に咲く沈丁花は、昔から私の好きな花の一つ。内側が白色、外側が紫赤色で十字形の小花を１５～６程ひとまとめにして、頭状花序に咲く。この花の香りに誘われて、日に一度は庭に出てみたりする。５年ほど前に買い求めた苗木が最初は育つかと心配していたが、今では枝振りもよく、かなりの花をつけ芳香を放っている。少し離れていてもかすかに匂って来るが、それでいて押し付けがましくもなく、やんわりとした品の良い匂いである。英名はダフネと呼ばれるが、知人にこの名をもった、BMI がはるかにオーバーの人がいる。先刻、言葉には映像を伴う云々とも書いた通り、可憐なこの花の名は間違っても英語で呼ばないことにしている。

日本の家には数本のくちなしの木があった。初夏に咲くこの花は、白蝋色の花びらに厚みがあり、光沢のある濃緑色の葉と相まって、清楚な中にも華やかさがある。昔、夜を徹しての勉強で、朦朧とした頭を冷やすのに庭に出ると、うす闇の中にぼんやりと浮きあがって見えるこの花が、強い香りを辺りに漂わせていたのを思い出す。ロンドンでは室内でしか育たないが、鉢植えのこの花の濃厚な香りに出会うたびに、あの試験勉強の辛さが蘇ってくる。

初夏から夏にかけては庭仕事も忙しくなる。咲き出したラベンダーは最初の数日はながめて楽しむが、それを過ぎると４～５株の内、半分は切り取ってドライフラワー用にと、風通しの良い場所につるしておく。楽しみはそれが乾燥された時。数本ずつ束にして前年の各所に飾られているのと交換するのだが、そのあいだ中、気分がすっきりするさわやかな香りを放ってくれる。こぼれ落ちた花々は、丁寧に拾ってサラダやパスタに利用したりもする。
昔、香水産業のメッカ、グラースに旅したことがある。一面ラベンダーで埋まった畑が限りなく広がり、紺碧の空と相まって光り輝くようであった。ただ、宿探しで迷い込んだ一角は驚くほど貧しげで、古色蒼然とした家々が迷路のように立ち並び、まるで“カスバ”、に足を踏み入れたようで不気味でもあった。グラースと聞けば必ずこの明暗、光と影の映像が思い浮かんでくる。

昨秋は菊の花が豊作だったので、”菊まくら”を作ることにした。本当は新鮮なうちに花を切り取り乾燥させると、香りも一段とよいと聞くが、せっかく育てた菊なので最後までと十分に眺めてから切取った。普通、日干しをするそうだが、イギリスの天候ではとても望めないので、窓ぎわのラジエイターのそばで乾かせた。枕と言っても菊の花びらだけなので薄っぺらなものである。普通の枕の上に置いて使うが、あの強い菊の香りが薄まって爽やかなものとなり、寝返りを打つとカサコソと乾いた音を立てたりする。
いつか北海道を旅した時、“ラベンダー枕”というのを買い求めた。中は何が入っているのか知らないが、薄っぺらのものではない。案外、ラベンダーの花など入っておらず、そ

の香りをカバーに浸み込ませているだけのものかもしれない。我が菊まくらは正真正銘の菊の花びらだけで出来ている。
においは、鼻から嗅球を通り大脳新皮質に到着する前に辺縁系を通る。そこは鎮静や不安解消の薬剤が作用する場所であると物の本にある。前述の枕は「安眠」が売り物なので、おそらく菊もラベンダーもそのような効能があるからだろう

日本には“香道”いうのがあり、いくつもの流派まであるそうである。その作法は茶道のようにお点前と呼ぶそうであるが、実際にみたことはない。おそらく香りを聞くために香炉に灰をいれて、香木を焚き、その何十何百と言われる種類を楽しむのであろう。平安時代には“薫物(たきもの)”と呼ばれ、鎌倉時代の終わりごろから“香道”として盛んになってきたそうである。
源氏物語の若紫の編にこういうくだりがある。源氏の君が数多く付き合われた女性たちの中でも、もっとも愛された紫の上の幼少時代に初めて出会われた僧坊での描写である。

「・・・僧都の坊は格別に風雅に、同じ草木も心遣いして植えてあった。月もない頃なので、鑓水 (やりみず) に篝火 (かがりび) を焚き、灯篭などにも灯が入っている。南面の部屋を大そう清らかに整えてあった。空薫の香りが心憎いほど漂い、仏前の名香も部屋一面に匂い満ちているのに、源氏の君のお召し物の香りはまた格別なので、内にいる女たちもうち解けてはいられないであろう。・・・」（円地訳）

昨今は男性も香水をつける時代であるが、正直に言うと私には何となく抵抗感がある。特にラテン系の男性に多いが、プンプンと強いにおいを放たれると、鼻について逃げ出したくなる。それでも、それは別として、源氏の君の衣服の香りは格別とあるので、どんな匂いであったのか知ってみたい気はする。

花の匂いもよいが、食べ物のにおいも捨てがたい。焼き魚、ステーキ、てんぷら、コーヒと食欲をそそるにおいが限りなく出てくる。落語でこんな話がある。ある男が、ウナギ屋の前を通る度に、かば焼きの美味しそうなにおいが漂って来る。「食いたいが金はなし」なので、一計を案じる。或る日、おかずなしの弁当を持ってそのウナギ屋の前にやってくる。まず鼻孔を広げウナギの焼けるにおいをいっぱい吸い込んでから、持参のごはんを食べて、「ああ、うめい」とつぶやく・・・・というのである。それでは、これは目的が少々異なるが、“フィッシュ・アンド・チップス”の店頭のケース。フィッシュを注文せずチップスだけを食べたら、カロリー摂取が幾分か少な目に済むので、減量に効果があるかも知れない・・・？

以前、BBC のドキュメンタリーでこういう話も出てきた。肉のジュージュー焼けるにおいにひかれるのは、本人の空腹感とは別に、狩猟民族であった原始時代の飢餓感が DNA に組み込まれているから云々…であるそうだ。そうすると農耕民族の日本人はさっきの話ではないが“焼き魚”が DNA に組み込まれている（？）のかとも思ったりする。
最近、或る JA の会員の方がヘストン・ブルメンタールのレストランで食事をされたそうだ。一人が２００ポンドと聞いて、その値段に驚いたり感心したりした。このシェフはキッチンの錬金術師と呼ばれ、奇想天外のレシピで人気が高いが、きっと腕が良いでだけではなく鼻も敏感なのであろう。しかし先程の DNA 云々の話に戻ると、このシェフはまるで魔術師のごとく、肉や魚を二乗して、それを二で割り、アロファーをプラスして作り上げるその料理は、狩猟民族の物でも農耕民族の物でもないようである。もしかしたら、別の天体からやってきた、宇宙人の DNA の持ち主かもしれないとも思ってみたりする。

南方熊楠のロンドン生活

松居竜五

近代以降、英国に長期滞在した日本人は数多いが、南方熊楠（みなかた・くまぐす）ほどにロンドンでの生活を満喫した人物もめずらしい。

慶応三（一八六七）年に和歌山で生まれた熊楠は、一八八六年、十九歳でアメリカに渡り、サンフランシスコを皮切りにミシガン州、フロリダ州からキューバまでを放浪しつつ、独学で西洋思想と自然科学の方法論を学んだ。そして一八九二年にニューヨークを経て船で大西洋を渡り、九月二十一日にリヴァプールに到着。すでに七年間もアメリカで生活していたわけだから、英国に着いた時にはかなりの程度、英語がしゃべれたと考えてよいだろう。熊楠はその他にも、フランス語、イタリア語、スペイン語について、辞書を用いて読みこなすだけの能力を獲得していたし、幼い頃からたたき込まれた漢文の理解力も相当のものであった。

数日間のリヴァプール滞在の後、ロンドンに移動した熊楠は、まずユーストン・スクエア（Euston Square 24）の安宿に居を定めた。そして翌一八九三年五月にケンジントンのブリスフィールド通り（15 Blithfield Street, Kensington, SW）に移り、ここを根城として旺盛な学問活動を展開することとなった。ハイストリート・ケンジントン駅の近くで、現在では高級住宅地のこのあたりも、当時は都心からは離れた場末の Mews つまり馬屋街であり、熊楠もことあるごとに「馬小屋の二階」として自身の下宿のことを紹介している。この頃熊楠の下宿を訪れた福本日南は、「その穢（きたな）いことといったら、無類飛切である。凹んだ寝台に、破れた椅子、便器の傍には、食器が陣取り、掃除なんぞはいずれの世紀に試みられたか分らぬ・・・」と部屋のありさまについて証言している。

ロンドンでの熊楠の学問活動の中心となったのが、大英博物館である。熊楠は友人の画商を介して、大英博物館の副館長格であったフランクス（Augustus Wollaston Franks）に紹介され、その官房で昼食を振る舞われて歓待された。熊楠は、極東からの貧乏書生を招いて厚遇するフランクスの度量に感激したが、フランクスの側では若くして学問に精通した熊楠を大いに評価した。この頃の大英博物館は、ヴィクトリア時代の大英帝国の海外での覇権確立とともに、エジプト、アッシリア、ギリシアの三大古代文明コレクションをほぼ完成していた。さらに、中国、日本といった漢字文化圏の遺跡や美術品の収蔵にも力を入れつつあったのだが、文字や文化の違いから、英国人の館員達はその整理に苦労もしていた。そこで、東洋美術部門の責任者であったフランクスは、熊楠にそのための補助を依頼したのであった。

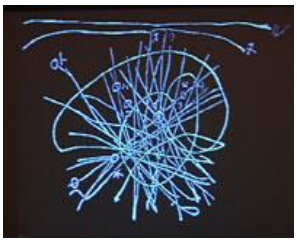
一方、熊楠にとってもっとも大きな意味を持ったのは、大英博物館の中央にある円形閲覧室である。百五十万冊を擁する当時世界最大のこの図書館は、女性を含めて一般の利用者に公開されていた。後に松方三郎によって「読書人の天国」と称されたこのリーディングルームで、熊楠は来る日も来る日も稀覯書の抜き書きに励んだ。この時、熊楠が主に筆写したのは世界各地の民族誌であるが、男色、半男女、自慰の記録なども「人類学」の資料として写し続けていた。また、ヨーロッパの東洋学の成果を、常に中国や日本の文献と照合しながら分析していることは、西洋一辺倒ではない学問のあり方として、現在の目から見ても大いに注目できるところであろう。

こうして、幼少期に読んだ和漢の本草学書や、大英博物館で得た最新の知識を基にしながら、熊楠は当時の日本人としては希に見る英国の学界での活躍をなしとげた。まず一八九三年に処女作「東洋の星座」が科学雑誌の『ネイチャー』に掲載され、以後、同誌への投稿を精力的におこなうようにな

る。『ネイチャー』への投稿数は生涯で五十一本に及ぶが、これは単著としてはこれまでの同誌の最高記録であるとされている。また、フォークロアの情報交換誌であった『ノーツ・アンド・クエリーズ』にも、ロンドン滞在の終わり頃に投稿を始め、こちらは生涯で三七三本の論文を発表している。

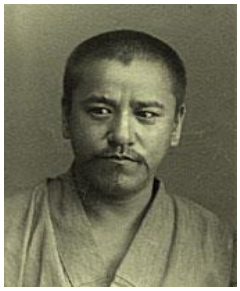
こうした学問活動を背景として、熊楠はロンドンで多くの知識人との交遊を得ていた。日本に長く滞在した経験のあるロンドン大学事務局長のディキンズ（Frederic Victor Dickins）は、熊楠の学識を特に評価した人物である。ディキンズは熊楠の『ネイチャー』での活躍を賞賛する手紙を送り、その後たびたび大学内の自分の官舎（おそらく Senate House の一角）に熊楠を招いて資金的な援助までおこなっている。また、日本美術のコレクターであった小説家のモリソン（Arthur Morrison）も、熊楠と非常に気が合ったようで、ラウトン（Loughton）の自宅に熊楠を招き、近くのエッピング・フォレストを一緒に散策したりした。モリソンはまた、熊楠をサヴェージ・クラブに連れて行き、同じく会員である英国皇太子が使った椅子に座らせて、感激させてもいる。

熊楠は、英国人だけでなく、他の外国人の友人とも多くつきあっている。一八九六年に清国公使館に監禁されて命からがら解放されたばかりの孫文と知り合い、半年以上にわたって毎日のように会って会話を交わしていた。英国人館員を前にして、一生の初期はと問われ、「願くは我々東洋人は一度西洋人を挙げて悉く国境外へ放逐したき事なり」と答えて、孫文を慌てさせたともいう。その他にも、インド人、イタリア人の友人などと、食事を共にし、酒を酌み交わすことが多かったことが、日記からは読み取れる。



ケンジントンの下宿から大英博物館までは、ハイドパークを突っ切って、マーブルアーチからニュー・オクスフォードストリートを東に進む経路になる。熊楠は昼前に起きて博物館まで一時間ほど歩いて通い、昼過ぎから午後八時の閉館の頃まで、閲覧室で筆写。その後、夜中まで角ごとのパブで飲み歩きながら、下宿に帰った。英国式のビタービールを好み、店々をはしごするために、ハーフ・パイントずつ飲んだようである。ロンドン時代の後期には、フラム・ロードのパブの馴染みの女給であったクレンミー嬢に淡い恋心を抱いたりもしている。そのパブを辞めた彼女と、ベイズウォーターの別のパブで偶然に再会した後は、手を握られるところまでは行っているが、それ以上には進展しなかったようである。

さまざまな意味で充実した熊楠のロンドン生活であったが、生活費の面では、渡英直前にポンドに対して円が 2/3 に切り下げられたこともあって、貧窮と言ってよい状況にあった。熊楠のロンドンでの生活を支えたのは、酒造業で成功した実家からの仕送りで、年間に約一〇〇〇円、一〇〇ポンド程度が送金されていた。その頃の日本では大金だが、それでも官費留学生であった夏目漱石の一八〇〇円と比べても少なく、物価の高いロンドンではやりくりがたいへんだったようである。フィッシュ・アンド・チップスを「天ぷら食う」と書いているような日はよいのだが、「鯖一本丸のまま食う」（たぶん Smoked Mackerel のこと）や、「兎一缶食い尽くす」（当時ウサギ肉の缶詰は安かった）というような食生活をしている日も多くある。



さらに、酒飲みで短気な熊楠の性格は、あちこちで問題を起こしてもいる。路上で喧嘩して巡査に注意されたり、留置所に入れられたりしたこともあるが、決定的だったのは大英博物館でのトラブルである。一八九七年十一月に他の利用者を殴って一ヶ月の利用停止処分を受けた熊楠は、翌年の十二月にも騒ぎを起こして、結局大英博物館を追放されてしまう。その後は、自然史博物館やＶ＆Ａ博物館の図書館を利用しているが、筆写の内容については、急速に多様性を失っていることが見て取れる。この頃には下宿もウォラム・グリーン（7 Effie Road, Walham Green）やフラム（1 Crescent Place, Fulham）のあたりを転々としている。結局、実家から仕送りを打ち切る旨の通知を受け、熊楠は帰国を余儀なくされてしまう。そして一九〇〇年九月に、丹波丸に乗ってロンドンを去ることになるのである。

帰国後に熊楠は、那智山に籠って植物採集に没頭。一九〇五年からは、紀伊半島南部の

田辺に定住して、家族をもうけて学問生活を送ることになる。しかし、そうした期間にも、熊楠は何度もロンドンに戻りたいと考えていたようである。長女の文枝は、いつかロンドンに連れて行ってやるという父の言葉を、晩年まで聞かされたという。『ネイチャー』『ノーツ・アンド・クエリーズ』への投稿は帰国後も長く続けられたし、『方丈記』を共訳したディキンズとの交流や、帰国後に開始されたリスター父娘との粘菌に関する共同研究など、英国とのつながりは、その後も熊楠の学問活動の中心であり続けた。

このように見てくると、紆余曲折はありながらも、熊楠はロンドンで同時代の日本人としては希に見るような成果を、ロンドンで挙げたと言えるだろう。その理由は、まず第一に、熊楠が若き学徒として、ロンドンの学界に真っ向からチャレンジする機会を得たということが挙げられる。この点で、すでに高等学校の教授として一家をなしたにも関わらず、専門領域であるから仕方なくロンドンに派遣されることとなった夏目漱石と大きな相違をなしている。また、一八九〇年代というヴィクトリア時代の最後の、完成期を迎えた大英帝国が擁していた知的寛容さも、大きな理由であった。この点でも、ボーア戦争が激化してジンゴイズム吹き荒れたまさに一九〇〇年にロンドンに到着した漱石の場合との、条件の違いを考えるべきであろう。

ロンドン、そして英国文化や人々との間に、良い時期に良い関係を結んだ南方熊楠の例に、私たちが学ぶ点は、多いのではないだろうか。

映画のエキストラ

早乙女健之

長年の会社勤めから去り、サラリーマン時代には考えられない待望の永久休暇の取れる身分になり、嬉しさや楽しさの入り混じった寂しさと不安にかられました。もう金輪際背広にネクタイは着なくてよし、自由になったのだ。私には特に退職後の人生設計などはなく、ただただ若い時から「移り咲く花に酔いし我が心未だ決まらず我が行く路は」、この俗世間では極楽とんぼ、自由に浮き草のように過ごしたいと思っています。

あれほど望んだ長期休暇、楽しい日々を送り早や三ヶ月が過ぎたころ、永年の会社勤めのくせなのか、何か仕事がしたくなり始めました。男女の仲もそうなのか数ヶ月もすぎると、ときめきがうすれてくるでしょう。そんな時、妻の友人を通してこの映画のエキストラの仕事に入りました。初めは何もわからず回りの人々の真似をしていました。通行人群集、観客等々。勿論本当に声を出してのセリフなどありません。時には話をしているように口をパクパクさせて声なしですることもあります。ある映画のシーンでは一観客になりました。両サイドは等身大の人形の風船。これにはあきれてしまいました。ああ私の実力とはこれらの人形の風船と同格なのかと思いしらされました。毎日いろいろな場所での仕事、しかも朝が早く６時７時はあたりまえ。朝一番の仕事は朝食（通常その場でのケータリングのバンからの朝食）フルコース、その後は服装のチェックーほとんどの場合は自分持ち故色々な服装が必要です。カラフルな物、赤、黒灰色等々、タキジード、背広、カラーシャツ、パジャマ、コート、運動靴等々。時には事前に衣装合わせもあります。自分のもの、又はプロダクションの方でそろえたりすることもあります。そして化粧ー男性は二分たらずですが女性は２０－３０分ぐらいかな？とにかく長い時間が必要。実

際の仕事は９時１０時過ぎくらいになる。しかしエキストラの出番は一日に一時間か２時間ぐらいの時が多い？？？その間はただただ待機しているのが通常です。

セリフもターゲットも責任もなく言われたことを「はいはい」しているだけ、あとはただただお茶を飲みながら？？お喋りをして美味しい昼食にありつける。午後の４時頃にはおやつ（サンドイッチ等）こんな仕事が世の中にあるのかと驚きました。本当に「エキストラと乞食は三日やったら辞められない」と思いました。エキストラのことを業界では S.A. (Supporting Artist) と言っています。エキストラと言うより Supporting Artist の方が響きがいいのでしょう。この国の階級社会性と言うか Positioning の名称のつけかたのうまさはさすがです。

しかし人間とは贅沢な生きものです。こんないい仕事でも時間がたつと同じ人々との会話にもあきてしまうものです。読書、クイズ、スドク等にも疲れてしまう。そしてこの待機時間は苦痛の時間になってくるのです。もちろんエキストラの仕事とはこうゆうものだと割り切ってすればよいのですが。

そのうちに Commercial や Model の Agent に入りました。勿論私は俳優の経験も俳優の学校にも入っていません。でもコマーシャルやモデルなら出来ると思いました。ただそのような仕事は Casting (オーディション)を受けなければなりません。倍率は非常に高く何十回も受けても全くだめ。自分は本当にだめ人間なのかと思いました。エキストラならできるのではないかと思いつつ Casting を受つづけました。どうしてだめなのか考え続けて。そのうちに年に１，２回うまくいくようになりました。

エキストラやコマーシャルの仕事でいろいろな役をやりました。映画でチョイ役をもらうと現場で個室がもらえ自宅までの車での送り迎えをしてくれます。でもこの次の時はみんなと同じエキストラ。いろいろな役をやりました。乞食　？？　サラリーマン、通行人、軍人、海軍総司令官、ヤクザの親分、大臣、大使、首相、国連事務総長、ポンビキ、女郎買、等々。日本の NHK 坂の上の雲にも出ました。

ある映画のシーンでは Queen Elizabeth 女王；Tony Blair のとなりの席ですわり（日本の大使役）、各国の貴賓席（各国の大使等）の前でテーブルにあがり、みんなの前でオーケストラに合わせてハンカチをふりふり、腰をふりふり（日本のキャバレーのチークダンスじこみ）踊ったこともありました。日本の大蔵大臣役でロンドンで、ロンドンブリッジとタワーブリッジをかんちがいさせられてロンドンブリッジを買いつける（アメリカ人、ロシア人、ドイツ人も一緒にだまされる）役。屋根なしの赤色のロンドンツワーバスの上部では国会ギジドウの説明を受け、その一行にいた金髪の女性も一緒なら買うことになった。そうロンドンの国会議事堂を買う為の頭金をだましとられてしまう…等々。

またこの国のブラックヒュウーモアなのか日本人をおちょくって、ばかあつかいしたようなものにも出ました。まったくこの国の人はと思う。でも私はそうゆう国で生活している一人です。さあこれからどんな映画やコマーシャルに出られるか、どんなエキストラになるか楽しみです。

英国春秋俳壇

俳句を学ぶ会もこの三月で一年たちました。その人なりにそれぞれ句にも個性があらわれてお互いに刺激を与えてくれます。作品の内それらしいのを選んでみました。

思い出を道連れにして春の風　　キング　悦子

山盛りの雪重からむ椿の葉　　福留　美穂子

八重桜一重二重と風に舞い　　バンダースケイフ　日出美

師を送る墓地広けしや春暮るる　　クーパー　矩子

流れゆく雲見ゆしとねきんぽうげ　　田口　邦子

夏ひざしあえぎ雨待つ花紫陽花　　ハートレイ　幸子

木枯らしに現る富士をあがめつつ　　上田　陽子

風に舞う落ち葉のような我が身かな　　マースィー富美子

年の瀬や馬車に引かれて墓詣り　　藤原　さかえ

英国春秋俳壇

か　ぼ　ちゃ

エリオット　つや子

たくましきかぼちゃ包丁立てて切る

いただきし栗飯の栗ほんのり黄

あおぞらにひこーき弧描く堅つぼみ

雪降らぬ冬も良けれど味気なく

チューリップ一束かかえ帰る道

一輪の水仙咲いたよよその庭

わが猫のピンクの鼻にも春陽ざし

病果てさくらを見ずや義姉の逝く

糸柳ゆらりゆらして弥生風

早咲きの桜ほころび２つ３つ

着物に魅せられて

佐藤智子

「日本人なのに自分で着物が着れない？其れはおかしい！貴女の国のコスチュームなのに。」これは 1982 年ロンドンの英語学校で劣等生をやっていたときにクラスメイトから言われたことです。言われてみれば確かにそうだと自ら納得した。

その後日本大使館文化センターの方に紹介された時、着物の着付けができるかを問われた。服飾関係の仕事をしていたと紹介されたため着物関連について期待されたようである。
ここでも否と答えると、いつか帰国の際にはそれを勉強してきてくれないだろうかと依頼された。私自身もキチンと着物が着れるようになりたいと思っていたので丁度良い機会とおもった。

80 年代は日本企業が大挙して英国に進出して来た時期であったので、日本文化に対する関心が高まり文化センターへの問い合わせが殺到していたようである。文化センターでは各分野の専門家、あるいはそれに対応できる人をスピーカーとしての登録を勧めキープしていた。着物についての問い合わせも多く入ってくるが対応できる人がいなく困っていた。その後帰国したとき、1 年間東京のハクビ着物学院で着付けを勉強することになった。

84 年に再渡英の時は数振りの着物を携えてきた。文化センターに「着物スピーカー」として登録することになった。そしてイギリスでの着物活動が開始した。地方でのイヴェントは 88 年のマンチェスターで開かれた大使館、ジャパンソサエティ　マンチェスター支部共催の「Ｊａｐａｎ　Ｗｅｅｋ」だった。この時はまず着物と帯を拡げてお見せした。小柄な日本女性にどうしてそんなに長い着物と帯が必要なのだろうと尋ねた人があった。そこで身長の異なる女性 2 名にボランテア　モデルになっていただき、2 スタイルを披露した。帯を締めるときはモデルさんたちは「ひゃっ！」と奇声を発して驚いていたが、始めての着物体験を楽しんでくださった。
1989 年ミルトンキーンズ市のギャラリーで 4 週間開いた「Ｋｉｍｏｎｏ　Ｌｉｖｉｎｇ　Ｔｒａｄｉｔｉｏｎ］のときは、ダイアナ妃がはじめてチャールズ皇太子と共に日本を訪問されたときに当時の中曽根首相、京都きもの協会から贈呈された打掛、振袖など 3 振りを拝借して併せて展示させて頂いた。たぶんそのお陰でその地方のテレビ、新聞に大きく紹介されて多くの人々が足を運んでくださった。ここでも週末に観客の方に着物体験をしていただいた。ギャラリー始まって以来最高の観客数だったとのこと。
最も多忙だった年は 1991 年ジャパン　ソサエティー　設立１００周年記念のイヴェント「Ｔｈｅ　Ｇｒｅａｔ　Ｊａｐａｎ　Ｅｘｈｉｂｉｔｉｏｎ］のときであった。
ありとあらゆる日本文化紹介の大イヴェントであった。あの時もロンドンだけでなくカーディフ、ベルファースト、ブラックバーンなどにでかけた。

私の本業のドレスメーキングではこのように多くのイヴェント、人々に出会うことはなかったであろうが、日本文化の一つである「着物」に関ったことで少しはお役に立てる機会を頂き、そして私自身も楽しみ 30 年のイギリス生活が活きいきとしたように思う。
今はもう自分で着物を楽しむのがせいぜいで、イヴェントに関る体力はなくなってきたが、着物に関るお若い方たちが幾人もでていらしたので頼もしく、これからも着物の素材、仕立て、着付けの多様さ等の世界に類の無い衣服文化を紹介し続けていただきたく、またご自身でも着物を楽しんで頂きたいと切に願っております。

ヒマワリ

古沢イクコ

庭に鳥の餌をぶら下げておくと、沢山のブルーティトがやって来てヒマワリの種をくわえると、すぐに飛んで行く。時々途中で口から種を落としてしまうのだろう。花畑の思わぬ所からヒマワリが生えてきて花を咲かせてくれる。

夏のある日、娘が婚約してフィアンセのご両親が挨拶に来られた。私はホールのテーブルに庭の花を活けた。しかし何か逞しさが足りないと思った。小ぶりのヒマワリを1本切ってきて真ん中に挿した。それで決まった。きりりと引き締まり、あたりをパーと明るくしてくれた。娘の未来を照らすように。

それから５年ほどたった夏の日、２人の子供の母と成った娘と庭のヒマワリの花を見ていた。私は活け花にしたヒマワリの事を話した。娘はそっと考える素振りをしていたがこんな話しをしてくれた。高校時代の友人の結婚式に行った時の話だった。

結婚式は教会で行われた。教会の中に入って、思わず立ちすくんでしまった。中はヒマワリで一杯だった。窓辺には瓶に挿した小ぶりのヒマワリが並んでいた。お父さんが娘の結婚式のために育てたヒマワリだと聞いた。「今、思ってみると、お父さんはなんと沢山のヒマワリを育てたのか、それに結婚式に合わせて咲かせたのだと思うと、お父さんの娘への気持ちが分かる様な気がする。」と言った。披露宴はお母さんや、おばさん達がケーキを焼き、料理した物が一杯に並んでいたそうだ。みんなの愛のこもった手作りの結婚式と披露宴。いい話だと思った。

昨年の春の事だ。庭のあちこちから大きな双葉が出て来た。なんだろうと夫に話すと、庭の空いた所にヒマワリの種を播いたのだと言った。ビックリした。庭仕事には、さほど興味を見せない人だったから、とはいっても、ヒマワリは強いのでバラ蒔いて靴で踏んで置くと鳥や野ネズミに食べられなかった種が生えて来る。

それからまもなく、夫は喉頭癌だと医者に告げられた。手術は出来ない、すれば声を失う事に成ると言われた。苦しい闘病生活が始まった。外国に住む子供達も１人ずつ帰って来て交代でチームをくみ、看病した。

夫の植えたヒマワリが庭一杯に咲いた。ガーデンルームのソーファーで横に成っている夫の方にヒマワリが顔を向け励ましてくれた。

夏が終わると治療が終わり、医者から「良く成りましたよ」と告げられた。

今年の春は私がヒマワリの種を播いた。

シャモニー・モンブランでのトレッキング

岡村光雄

今年 2014 年は私の大好きなリヒアルト・シュトラウスの生誕 150 年にあたり、ロイアルフェスティバルホールでも彼の作品が数多く演奏されています。特に 3 月 20 日の演奏会でのロリン・マーゼル指揮、フィルハーモニア・オーケストラによる「アルペン・シンフォニー」は大熱演で満員の観客の喝采、スタンディングオベイションでした。この曲は作曲者のリヒアルト･シュトラウスがアルプス登山をした時の体験をスケッチし、各場面(夜明け・日の出・登り道・林と森の道・頂上の眺め・霧・嵐の前の静けさ・雷雨と嵐の下山・日没・夜等)に各種の動機(夜の動機・日の出の動機・山の動機・岸壁の動機・山登りの動機・太陽の動機)を組み合せてオーケストラ化した壮大な交響詩です。
100 人以上の奏者による大編成のこの大曲に魅せられている内に、昨年 9 月フランスのシャモニー・モンブランでのトレッキングの思い出が脳裏に蘇って来ました。

昨年 9 月の旅行は
日本からやって来たカップルと 4 人でこのシャモニー･モンブランでアルプスの景観を楽しみ、山岳リゾートの雰囲気を味わう事を主目的に、スイスのジュネーブ、イタリアのアオスタ・トリノを巡る旅です。シャモニー・モンブランではケーブルカー・リフト・登山電車を乗り継いでのアルプスの山々の景観を楽しむだけでは物足りない。このチャンスにトレッキングにも挑戦出来ないかと意見が出ました。
全員とも完全にシニアで山歩きは数十年ご無沙汰していますが､私は若い時にテント担いで山歩き・スキー担いで山スキーの経験があり、カップルの男性はワンダーフォーゲル部にいた事が有り、女性二人もスキーの経験があるとの話から、現地に於いて天候の確認・経験者のアドバイス・装備の確認をする事にし、数あるトレッキングコースの内、ポピュラーなプラン・ドゥ・レギーユ(エギーユ・デュ・ミディ行きのロープウエイの中間駅 2,317m)から標高 1,913m のモンタンヴエールまでの延長 5.9km 約 3 時間のコースを選びました。

私達の訪ねるシャモニー・モンブランは
ヨーロッパアルプス山脈の、イタリア・フランス国境に聳える最高峰モンブラン山(4,810m)北側(フランス領)の麓に位置します。この町の歴史は比較的新しく、1786 年ここを起点に二人のアルピニストが魔の山と恐れられていたこの山の初登頂に成功した事からヨーロッパの登山家の注目を浴び､山あいの寒村すぎなかったこの町が世界の登山家の登山基地として発展、現在ではフランスらしいその洗練された街並みと、モンブラン針峰群・モンブラン山群の威容を間近に臨める山岳リゾート地として、又世界の観光客とアルピニストそしてスキーヤーの憧れの地となっています。

旅の始まりは
ジュネーブからシャモニーへの雄大な山々を眺められる高速道路を定期バスで約 1 時間 30 分のドライブ。お昼前にはシャモニーのバス停留所に到着。ホテルに向かう途中出会ったハングライダー好きの日本人のおじさんから早速ロープウエイの乗り場と混雑状況、お薦めレストラン等を教えてもらい、又私たちの選んだコースはシニアでも大丈夫だろうとの事。

町の中央にあるインフォメイションセンターで翌日の天気を確認。「午前・午後とも晴」

との太鼓判に意を強くしました。
シャモニー在住の日本人スタッフが居る町で一番大きなスポーツ店「スネルスポーツ」を捜し装備について、「予定のコースは私達でも大丈夫。只現在履いているウォーキングシューズでは石の多いコースなのでスリップして危険。トレッキングシューズが必要」との薦めで急遽この店で調達しました。
最後に付近のコンビニで非常食を購入し準備完了。明日の登山の成功を祈願して、中国料理店(シェ・ヤン)で前祝い。
ホテルに戻ってから間もなく雨が降り出しそれも夜遅くには強くなりましたが、明日は晴れと確信してベッドにもぐりこみました。

翌日の早朝には前日夜の雨も上がった様なので、ホテルから飛び出して周囲の山を眺めてみました。山の中腹に垂れこめた黒い雲もどんどん切れてきて針の様にとがった峰々が姿を現し、又後ろの頂きには白い雪で覆われたモンブランの姿も眺める事が出来る程になりました。
早めの朝食、新品のトレッキングシューズで意気揚々と出発。小川の流れている小道を10 分程歩くとエギーユ・デュ・ミディ駅行きのロープウエイの出発駅に到着。
小奇麗なこの山岳駅は早朝にも拘らず本格的登山姿のグループ、軽装の中年婦人のグループなど様々な人達が続々集まってきます。それでも 50 分程で 70 人乗りのロープウエイに乗る事が出来ました。
この高速ロープウエイは 1,000m の高度差を 8 分程で中間駅 2,300m のプラン・ドゥ・レギーユに到着。大半の人は更にリフトを乗り継いで頂上に向かいますが、此処で下車して総延長 6km、高低差 400m モンタンヴェール(1,990m)展望台迄の、約 3 時間のトレッキングの開始です。

ひんやりとした山の空気、風もなく雲ひとつない絶好の天気。周囲はシャモニー針峰群と言われる「頂上が白い花崗岩で出来た針の様に険しく尖った山々」が連なり、ボソン氷河の跡、遥か下にはシャモニーの町も望めます。日本の山々では経験出来なかったヨーロッパアルプスの厳しい景観です。
標高 2,300m のこの付近はもう森林限界で背の高い木は生えて居ません。大きな石がごろごろした道をロープウエイに沿って真っすぐ少し下るとホテル兼レストランの山小屋が見えて来ました。
ハイカー姿の登山客でほぼ一杯でしたが、私たちも一休み。下方に見える美しいシャモニーの町を眺めながら、美味しいブルーベリーケーキを味わいました。

ここからシャモニー針峰群の山腹をトラバースする様に伸びるルートが始まりますが、ガレ石が多く、所どころの大きな岩、小さな沢も超える必要がある等、歩きやすい道とは言えません。でも周りの雄大な景色、道の両側の濃いピンク色のアルペンローズが岩々を覆い隠すように群生している姿を眺めたりしていると、歩きづらさを忘れさせてくれます。
反対方向から上ってくるハイカーの姿も見かけるようになりました。すれ違う時のハイカーのエチケットは日本では「こんにちは」の挨拶ですが、さすがにこちらでは殆どの人が「ボンジュール」そして「グッドアフタヌーン」。懐かしい「こんにちは」の声も、日本人の若い女性グループも見かけました。
天気は快晴、強い陽射しから汗ばむ陽気になって来ましたが、途中には休憩所もなく、陽射しを遮る大きな木も生えていないのでモクモクと歩くだけ。少しバテ気味の状態になってきました。
それでも頑張って進むと二股に分かれる分岐点に来ます。事前に読んだ登山ガイドでは一つの道は分岐点を直進する歩きやすいコース、もうひとつ道は右側の上りの道で一気に急坂を登るコース、と解説してあります。大半の人がこの登る道を選んでいます。どちらにするか?悩みましたが、今回は自重して、真っすぐな歩きやすい道を選びました。

処が歩きだして見るとこれが歩きやすい道?と思いました。歩き易いどころか、道路も狭く道の右サイドは急斜面の岸壁、シャモニーの町が見える左側の沢は切り立った崖で柵も有りません。右側の斜面にそってトラバースする様に恐る恐る進みます。人気がないコースの為か、行き交うハイカーも殆どいません。しばらく進むとモミやカラマツの林の中に入ります。ここからは少し歩き易くなって来ましたが進めど進めどいっこうに目的地が見えて来ません。すでに３時間半も経ち、三時を過ぎてくると太陽が西に傾きだしています。道を間違ったか?一瞬遭難か?不安になってきました。半信半疑で歩き続けると、列車の車輪の軋み音がかすかに聞こえて来ました。カラマツ林を登ってくるアプト式の赤い登山電車が近付いてきました。間もなくモンタンヴィエール登山駅も見えてきて、ほっと一安心。おもわず万歳を口ずさみたくなりました。

標高 1,910m のモンタンヴィエールの展望台からの眺めはすばらしく、まず目の前に広がるメール・ド・グラスの氷河。遠くにアルプス山脈の山々。アルプス３大北壁のひとつと言われる、標高 4,208mk グランド・ジョラスの北壁も見えます。ここで充分景色を堪能した後、アプト式の登山電車でシャモニーの町に戻りました。

夜は町の中心のレストランで、ここの特産サボア地方の白ワインで４人の無事を乾杯。閉店まで料理を楽しみ、冒険談に花を咲かせました。
翌日、白い雲に覆われてしまったシャモニー・モンブランの山々に別れを告げ、全長 11.8km のモンブラントンネルを抜けて次の訪問地ローマ帝国の遺跡で有名なイタリアのアオスタに向かいました。

小学校の頃の懐かしい思い出

田村陽子

　ようやく、ロンドンも春らしくなってきた。近くの桜並木は満開で２０本程の白い桜が雪のようだ。“きれいだナー”とうっとりしながらいつの間にか故郷、富山の桜に思いをはせるのだ。そして子供の頃の懐かしい出来事を季節ごとに綴ってみたいと思った。

<u>春の思い出</u>

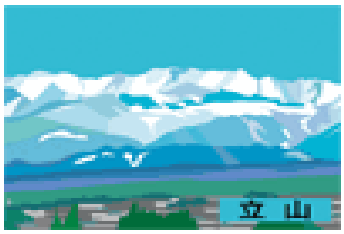
　長い北陸の冬も終わり、ふきのとうやよもぎが目を出す。母はよもぎ入りの草もちを作ってくれた。又、母の手編みの若草色のセーターを着てズック靴をはいて一年生の入学式へ。下駄箱が１年生から６年生まで一ヶ所にあったので、大混雑で、母とはぐれないように、泣きそうになって、しがみついていたっけ。
一年生の担任はあみたに先生という若い女性だった。授業中、男の子が質問する時に“かあちゃん”と思わず言ってしまって、皆が大笑いしたっけ。
　５月になると、全校一斉に田植え休みと称して一週間休みになった。生徒の殆どの家が農家だ。農家は猫の手も借りたい程忙しい。

私の家はわずか三反余の田があった。本家の田植えと合同でやることになっていた。朝５時頃起きて“苗とり”が始まり、ついで、腰に苗かごをつけておじ、おば、父母、祖母、いとこ、兄が一列に並んで、各自３列ずつ苗を小分けにしながら前に進んで行くのだ。ドロドロの土に素足で入るので、時々ヒルにかまれて大騒ぎした。農協の屋根にとりつけられたサイレンがお昼を知らせると、皆、溝を流れる流れで手を洗い、昼食だ。前日から用意された煮しめや赤飯のおにぎりが青空の下で、本当においしかった！

又５月の初旬の Golden week の頃は、海辺にある母の実家に行って、ほたるいかをつかまえた。その頃産卵のために岸辺に来るらしかった。人さし指位のほたるいかが手づかみで取れた。新しいうちにサシミにしたり、ゆでて酢みそあえにしたりした。ほたるいかのとれる頃、水平線のかなたに、蜃気楼を一度だけみた。その日は風もなく、もやっとした暖かい日で、かすかに色のついた家や山々が空に写しだされたのを覚えている。
ちなみに、今はもうほたるいかは沖の方でしかとれなくて、観光船が出ているようだ。

夏の思い出

１学期の終わり、７月の後半に全校生徒が４０分位歩いて海に行った。先生は荷車に大きな鍋や食材をのせてゴロゴロひいて行った。昼食のブタ汁やお茶を作るためだ。私は水遊びばかりでいつまでたっても泳げなかった。夏休みになると、毎朝ラジオ体操に通った。又村の公民館での子供会に参加し、映画をみたり、お話を聞いたりした。お宮さんの草むしりや、地方鉄道の無人駅のそうじをしたりした。貸切バスに乗って村の人達と“大岩の滝”へ行った。滝はずっと上から落ちてきて体がふっ飛ぶ位の勢いで落ちてくるので、滝に打たれるのが恐かった。



秋の思い出

家にある柿や栗、いちじくが実った。これが子供のおやつだった。だから誰も虫歯は一本もなかった。誰も歯医者に行く子供はいなかった。
稲刈りの手伝いをした。　鎌でサクサク切りながら、束ねるのは結構難しかった。妹は小さくて手伝えなかったけれど、仕事が終わると、夕焼けを見ながら、二人で２部合唱をした。私は子供の頃から合唱が好きだった。父は手を休めると、立山連峰を指さしながら、“あのギザギザの山が剣岳、なだらかな所は弥陀ヶ原、父ちゃんはスキーで滑り降りたもんだ。”と説明が始まる。だから私も高校の頃から山登りが、好きになった。

冬の思い出

雪が軒に届く程高く積もった。出窓のガラスに雪の結晶がはりついてきれいだった。出窓の内
側に障子戸があった。こうして寒さを防いだのだろう。出窓の真下に小さな小屋を作り、うさぎが３匹飼われていた。黒と白のアンゴラうさぎだ。うさぎを飼う前は山羊がいた。父が山羊の乳をしぼって、私たちも飲んだし、近所の病気がちの人に届けたりした。

学校に行くと、教室の火ばちが赤々と燃えていて、そこにアルミ製の大きな蒸し器がのせてあった。来た者から順番に、ごはんだけつめた弁当箱を重ねていくのだ。おかずは給食のおばさんが作ってくれる豚汁だ。材料の野菜は各自、大根、ニンジン、じゃがいも、玉ねぎ等を給食室に持っていくのだ。野菜のない者はお金を置いていった。４限の授業の終わる頃には、弁当はポカポカ、豚汁がよい香りを放っていた。

ソチ 2014　オリンピックボランティア奮闘記

西川　千春

雪降るモスクワ空港を経由して、降り立ったソチ空港は気温 12 度の快晴。ステレオタイプなロシアのイメージを見事に裏切ってくれた。これじゃあせっかく調達したヒートテックも意味がないじゃないかと思いながらも、これから始まる 3 週間のボランティア活動への期待と不安で一杯だ。今まで世界のいろんなところにいったが、なにしろロシアは全く初めてなのだ。そんな思いを懐きながらゲートを出ると、一度スカイプで話をしたメインメディアセンター（MMC）の通訳チームマネジャー、上司となるジュリアが待っていた。彼女の笑顔を見て、「さあ、これから楽しい 3 週間が始まる」と思うとなんだかワクワクしてきた。

話は 2012 年夏まで遡る。ロンドンオリンピックでエクセル会場のボランティア通訳リーダーを務めた私は、祭りの後の虚脱感に苛まれていた。あれだけ興奮し、同じ街にいながら日常とは全く異なる異次元の 2 週間を経験したことで、不治の病「オリンピック症候群」に感染してしまったらしい。その結果が 2 月 7 日に開催されるソチ冬季オリンピックへのボランティアとしての参加だった。実のところ、わざわざロシアまで出かけてボランティアで働くなんて狂ってるな、とも思う。それでも、やっぱりやるしかないとオンラインで申し込んだアプリケーションに採用通知が来たのは、なんと開会まで 4 ヶ月もない 10 月だった。ロンドン 2012 では 1 年前には決まっていたのに、随分ゆっくりなものだ。ソチ五輪ではパラリンピックも含め、約 2 万 5 千人のボランティアが参加する予定だ。その内、海外から来るボランティアは約 2300 人にものぼる。ところが 12 月になって届いたボランティアの詳細を見ると、開始日が 1 月 7 日になっているではないか。どうやら配属される MMC は開会の一ヶ月前からオープンするので、初っ端からの出てくれということらしい。「一番有能な通訳をここに配置する必要がある。お前の経歴は何者にも代えられない。」と、凄いお世辞だ。結局 1 ヵ月半もロンドンを離れることはできないので、開会前に帰国するしかない。開会式を自宅のテレビで観るのは残念だが、諦めるしかなさそうだ。煽てられるとすぐその気になってしまう私は、二つ返事でオファーを受けてしまった。

海外ボランティアのトレーニングは最後に現地での会場見学・説明を除いて、全て出発前にオンラインで受けることとなった。ロンドン 2012 のときと同じく、オリンピックの歴史、競技の内容、ソチ 2014 の詳細、セキュリティー、クライアントへの対応、さらには通訳に関する内容などをカバーしたものだ。資料を読んで質問に答え、8 割ぐらいできればパスする仕組みになっている。広大な領土を持つロシアなので、多分ロシア人でもオンラインだけでトレーニングを受けている人が結構いるのではないかと思う。なにしろ、ボランティアはロシア全土から集まっているだ。後で彼らに聞くと、「近くから来たよ、バスでせいぜい 40 時間」、なんていうのはごく普通のようである。狭い島国から来た人間から見ると、本当に異次元の世界に来たのだとつくづく感じざるを得ない。

ともあれ中国からやってきたジャイー、イタリア人の二コールと一緒に連れられた先はちょっと年代がかったホテルだった。いかにもソ連時代の建築で、若干修繕して使ってるん

だろう。ジュリアに聞くと、当初予定されていたボランティア宿舎が完成せず、このホテルが仮の宿舎になるそうだ（結局はそのまま居つづけることになった）。ホテルは二人部屋なんで、当初の 4 人部屋よりましだとのこと。実のところ中年オヤジには相部屋はつらいものだが、同居人が歳の割りにさばけた青年なんで本当に助かった。相棒はフランス人で大学卒業したて、通訳の仕事を探しているコリンだ。MMC の通訳チームボランティアは約 40 人、その内外国人が私を含めて 10 人にものぼる。カナダ人のアンドルーを除けばロシア語は全くだめだ。おまけに男性は 7 人と少数派で、ロンドンでも同じく通訳チームは女性ばかりになる。びっくりしたのは、私を含む数人を除けば後は全て 20 代だ。組織委員会によるとソチ 2014 ボランティアの平均年齢は 23 歳。バンクーバーの 40 歳、ロンドンの 36 歳と比べて桁違いに若いことが分かる。しかも 70%が女性だ。

さて、ユニフォームと身分証明カードを支給された我々は、翌日から活動場所となるメインメディアセンター(MMC)に出向いた。一部のボランティアは既に仕事を始めているものの、MMC に配属された通訳チーム（ラングエージサービス、略して LANS）は実質現地入りするボランティアの第一弾となる。言ってみればパイオニアなのだ。まさに開拓者にふさわしく、宿舎、会場、交通などのサポートは準備が十分整っていない。そんな中でいろいろ試しながら、フィードバックをして行くのも我われの役目らしい。何しろはじめの数日はスタッフのための専用バスもろくに動いてないのだ。初日 5 時起き、ぎゅうぎゅう詰めの乗り合いミニバスに乗り込んで MMC の入り口についてみると、何と通行パスのデータが翌日からの勤務になっていて入れない！マネージャーが特別許可を取って会場入りしたのは 2 時間経った後だった。それでもほとんどが二十歳前後ボランティアたち（当然私を除く）は、修学旅行のノリで楽しく騒いでいるではないか。取材に来た Y 新聞カメラマンの M 氏の言われるままジャンプしたりして喜んでいる。同化しやすい私は、こりゃあ開き直ったほうが勝ちだと思った。

ロンドン 2012 ではメイン会場のひとつであるエクセル（卓球、柔道など 7 種目実施）で試合後のビデオ・プレスのインタヴュー、アンチドーピング検査、救急医療の通訳をこなした。今回は競技会場ではなく、MMC にてオリンピック報道にたずさわる各国からやってくる新聞社、通信社、テレビ局の関係者がクライアントとなる。LANS メンバーは入り口にあるメインヘルプデスク（MHD）、記者会見場サポート、翻訳等をメインにする一般事務と 3 チームに分けられた。私は MHD に配属された。マネジャーはギリシャ人のカリオピとイギリス人のレベッカで二人とも組織委員会の職員だ。その他、MHD 直属とプレスオペレーション担当のボランティアが同僚となる。マネジャーを含む 4 人が有給スタッフ。あとは全てがボランティアで、合計 20 数人が 2 つのシフトに分かれて朝から晩まで勤務することになる。放送局はそれぞれスタジオを、そして新聞社・通信社は取材のベースを設置している。15,000 人にものぼるのジャーナリストのために、美容室、郵便局、銀行、レストラン・バー、クリーニング屋、コンビニ、トレーニングジムなど、そしてご存知スポンサーのマクドナルドまで完備する巨大なビルだ。

なんと MMC には知った顔が沢山いた。プレスオペレーションのイギリス人ボランティア、ロスはエクセルのボクシング会場のミックスゾーン(選手が試合直後のインタヴューを受ける場所）で一緒に仕事をした仲だった。そのほかにも ONS（オリンピックニュースサービス）レポーターのジョナサン、エンジニアのジョンも居るじゃないか。エクセル会場の通訳マネジャーだったフランス人のシルバンも ONS のレポーターとして来ている。同じメンツが 2 年ごとに集まってくる、言ってみればサーカスだ。あちらこちらで「やあ、久しぶり。また一緒だな。」と挨拶している。狭い社会、どうやら私もその一員になったようだ。日本のメディアの事務所にはカップラーメンが大量に山積みされているのを見て、思

わず笑ってしまった。彼らのチェックインのサポート、プレスキットの準備、記者会見ホールのセットアップなど仕事が増えて、ようやくオリンピックが始まる雰囲気がでてきた。

ソチのボランティアたちは基本 20 歳前後の大学生が中心だ。通訳チームは当然として、メディア、選手・関係者とコミュニケーションをとる必要がある部署では最低でもある程度の英語をしゃべる必要がある。残念ながらロシアにおける英語の理解度は非常に低く、一歩街にでるとほとんど英語が通じないのだ。したがって、ある程度英語を勉強している学生から選抜せざるを得なくなる。さらにロンドンと違い、草の根レベルでのボランティア文化がないので一般市民のボランティアは実質存在しない。つまり 30－50 代で実務経験をもったロシア人のプロフェッショナルがいない訳だ。この点、英語が母国語で、幅広いバックグランウンドを持った市民がボランティアとして参加したロンドン 2012 とは状況が全く異なる。現に、海外からのボランティアにはロンドンやバンクーバーの経験をもった年配者や現役社会人が数多くいる。しかしながら基本、社会経験がない大学生をベースに考えられたボランティア組織ではこれらの有能な人材を活かしきれないのが実態である。また社会人であれば 2－3 週間働くのが精一杯だ。学生のように 1 ヵ月半も活動はできない。

この問題点は特に専門知識や経験が要求される職種において顕著に現れる。オリンピックボランティアの場合、通訳は重要な部門であり、サービスを提供する相手先は組織内の報道部門、医療、アンチドーピングなどとなる。組織外向けには選手・関係者や放送局、新聞社が対象だ。一般の観客は対象とはならない。今回ソチ 2014 ではロシア語環境という事情もあり、選手とオリンピック報道サービス（OBS）、ニュースサービス（ONS）を相手にする試合後のインタヴューなど、最前線での仕事をほとんどプロの通訳に委託している。したがってボランティア通訳の仕事は限られたサポート的業務にならざるを得ない。ロンドンではインタヴューも含め全てボランティアの通訳で対応していた。卓球や柔道など 7 種目を行ったエクセル会場では我われ 100 人以上のボランティア通訳が 20 数ヶ国語を操っていたのとは対照的である。

いよいよソチを離れる日が近づき、仲間たちが私の送別会を開いてくれた。本当に LANS チーム全員が揃ったのには感激した。おまけにマネジャーのジュリアやイレーナたちも来てるのにはびっくりした。そして最後に、「次は東京で会おう。ひょっとするとリオかもしれないな。」という言葉をお互いにかけて別れることになった。競技場での緊張、声援、音楽が一体となった興奮の異次元空間を体験できないのは非常に悔しい。しかし明るく、好奇心にあふれた若い仲間たちと 3 週間一緒に生活し活動できたのは何物にも代えがたい経験だ。どういう訳か、コリンと私の部屋は皆の集合場所のようになっていていつも誰かが入ってくる。旧暦のロシア正月には 30 人にも膨れ上がって、セキュリティーに注意されてしまったほどだ。それにしても若いロシア人の日本に対する興味は半端ではない。政治、歴史から食べ物、アニメ、J-POP に至るまで何でも知りたいようだ。彼らといろいろ話をして、少しは勉強になったのではないかと思う。少なくとも何人かは Perfume のファンになったはずだ。3 週間という短いロシア滞在だったが、楽しい体験だった。それではこの愛すべきロシアとその仲間たち。また近いうちに会おう。ｄｏ　ｓｖｉｄａｎｉｙａ（ダスビダーニア）！

ドバイの 印象 “共生の砂漠のオアシス ”

バロー　典子

３０年も前に英国商社勤務の夫の転勤で､私たちはサウのアラビアに３年住んだことがありました｡その時にお出会いしましたパキスタン人の友人夫妻に英国でたまたまお会いしました。今はドバイに住んでいらっしゃるとのことでした。以来、何度もお誘い頂いておりましたことが、この度、ドバイでの夫の会議出張が重なり、ドバイ旅行が実現することになりました。

何の知識も持たずに、また先入観もなく参りました私にとりまして、ドバイは新鮮な驚きでした。それはかって住んだり、旅行したりして見た中近東のアラブの国々で見ることもなく、また想像することもなかった風景がそこにあったからです。

ドバイは UAE （ アラブ首長国連邦)の首長国ひとつですので、その名前からして当然のことにアラブ人の国でしたが、旅行者の私がドバイのアラブ人に出会い話しましたのは、入国監査員のみでした。－そのアラブ人は人国を審査するというよりは砂漠をゆく旅行者を暖かく迎えるというイスラム本来の親しみある態度でしたので、国への入り口からして、このアラブの国に親近感を覚えました。

その後、私が飛行場から出会った人の、ひとりひとりが他の国からの人つまりこの国にとっては外国人であり、違った人種でした。（ロンドンも外国人が多い都市ですが、―日中ほとんど地元の英国人に出会わないというようなことはありません。）―勿論、会議出席の夫は地元の多くのアラブ人にも会いましたー

聞いてみますと､この国の９０％が外国人で１０％がドバイのアラブ人とのことでした。尚、人口約２百万のドバイを構成する外国人は１８０ヶ国にわたるとのことでした。

すでに、世界の４５ヶ国を旅した私たちにとっても、このような国ははじめてでした。通常はその国の人が地元の大半を占めて、外国人がその他の何パーセントかを占め、多い場合でも外国人が半数以上を占める国にはまだ行ったことがなかったからです。

以来、会う人毎に、“はじめまして、私は日本人ですが、あなたは何人ですか､”とお尋ねすることから会話がはじまりました。ルーマニア人です、などと答えが来ると“あなたは私が初めてお会いしましたルーマニア人です。”と話し、自然と会話がはずみました。いろいろな国の人がそれぞれに生き生きして､明るい表情で働いている姿をドバイで見るのは気持ちの良いことでした｡そしてその外国人の誰もがドバイに住むことを喜んでいました。―週間ほどの旅行でしたが、そこに小さいながら“ 世界平和”が具現されているように感じられたことが、私が何より感動したことでした。人類共通の願いである他民族との｢共生｣をイスラム圏のドバイがこうした形で実現させていることが一番の驚きでした。

ドバイにはアラブの主な宗教であるイスラム教を守る為の厳しさはかけらも見られず､宗教の自由があり、またそれぞれの人種や男女が平等に自由に、かつそれぞれの服装で、それぞれの職種を全うしている姿が見られました｡そして外国人たちの共通語は英語でした。ドバイに行ってから、わかったことですが、この地で有名な建物は世界一の高さを誇る地上８２８ｍの超高層ビルでした。エレベーターで１分で４５２ｍにある At the Top とよばれる展望台に着き、眺める四周はまさに別世界､“砂漠に造られたオアシス”都市とでもいうべきでしょうか。青い空、青い海、超近代高層ビルの林立する景色、その向こうにはベージュ色の砂漠が延々と拡がっていました。

世界で最も高い建物としてのタワーのロビーに掲げられた写真の人物は　シェイク　モハメド　アル　マクトー

ム陛下、彼はUAE の首長国のひとつであるドバイの首長であり、かつこの国のリーダーでした。その人の言葉として　"リーダーの辞書には不可能という言葉はない、強い信念と決意と解決への意志があれば、どれ程大きな困難であろうとも、克服することができる“―この地上のすべての国際的な専門家の協力によって、かって前例がない世界ではじめてのこのバーティカルな都市が創造されました。―

このように　彼は世界の最先端の新技術の粋を集めて、この都市の建設が可能になったことを讃え、協力した国や人々への感謝を記していました。これを読んで、アラブ人のこの優れたリーダーに心からの敬意が湧きました。こうしてドバイは世界―の仰天計画を次々に実現して来たのでした。（例えば、ドバイに住む人の自慢のひとつのメトロは日本が造ったものでした）タワーの真下には噴水ショウが催される人口湖の青い色が拡がっているのが上からよく見えました。そこでは夕刻になると、３０分毎に行われる噴水ショウが見られます。世界最大ともいわれる規模で音と光に合わせて、水が花火のように１５０ｍも天高く上がったり、また巨大な水の踊り子が踊るような大スペクタルショウが見られます。（これはアメリカの協力で造られました。）これはドバイの世界最大の水族館と共に必見のひとつになっているものです。友人のアドバイスに従って、そういう必見の場所を観ました。

その後で私たちは郊外に出て砂漠の真ただ中に造られたホテルに一泊しました。ラクダに乗ってみたり、夜は静かに砂漠に瞬く星を見て、眠るというようなこと（いつか一度したい思ったこと）をして大いに楽しみました。冬季のドバイの気温は毎日２３度前後で，快適でした。”ドバイはお奨めです。”

しかし　私はここで、この素晴らしいドバイの観光の案内のつもりで書いているのではありません。この旅を通して、砂漠の地にて不可能を可能にしたドバイへの感動と同時に、少し気になったことを書きたいと思いました。

いろいろな国の人に次々とお会いして、私は喜んでいましたが、ホテルでの朝食の折に笑顔できびきびとサーブしてくれました中国人やフィリッピン人やマレイシアの女性の姿を見てはたと気付きました。私はこの地で働いている日本人にまだ会っていないということでた。１８０国もの国の人がドバイに働いていて、ビザもそう難しくないと聞いておりましたが、働いている日本人にはなぜ会わないのかしら、と不思議にまた残念に思いました。（その内に、例の有名なタワーなどで、観光客としての日本人には大勢会いました。）それにしても、日本食が流行っているのですから、そこに働いている日本人はいらっしゃるはず、なのにと思い、このホテルに日本人は働いていますか　と聞いてみました。“タイ　レストランにマネージャーとして日本人女性が働いていますよ。彼女は私の友人です”と中国人の女性でチーフ　ウエイトレスが嬉しそうに答えてくれました。

早速　彼女に会う為にタイ　レストランに昼食にゆきました。彼女は３０代位でしょうか。感じもよく、見た目にも素敵な女性でした。彼女は率直に、私の質問に答えてくれました。“日本人でも海外で働きたい人は大勢いますが実用に足る英語が話せないことが一番のネックになっています。私もはじめはむずかしく、苦労しましたが、ここが自分を活かせる場所と思えたので、改めて、アメリカで実用英語を学び、再度ここに来て、２年半になります。来て良かったと思っています。”とのことでした。”“英語が問題ということは学校で学んだ英語はほとんど、実用には役に立たないことが主な原因です。“との指摘でした。（尚、ドバイにはの日本食、寿司レストランが最近多くなり、そこに日本人のシェフが働いているとのことでした。またこのアラブの国には強い親日感情があること、それはビザの発行や運転免許の書き換えなどの面で感じられるとのプラスの実感をも伝えてくれました。）

グローバル化が急速に進んでいる世界の中で日本は世界に誇れる優れた文化(食文化を含め)や伝統、近代的なクールな製品や、ポップカルチャーをもっています。次代を担う日

本の人たちが自信をもってますます世界にのり出して欲しいと思いました。海外に住み、消えゆく世代に属しながら、そのように思う日本人は少なくないと思います。
伝統文化のみならず、日本人ひとりひとりが自然にもつ特別な美意識や人柄、そうしたものは長い間の先人の努力のお陰ですでにあるもの（一朝一夕には身に付けられないものですが）一方、会話や伝達の方途である英語は幸い比較的短期間に身につけることができるものです。またそれは完璧にする必要はなく、会話の役に立ち交流が深まるものであれば良いと自分の経験上でも思っています。
ドバイで私が出会った近年進出が目立つ多くのアジア人を含めて、世界の共生はその一人一人からはじまるという考えをもとにすれば、より多くの日本人が広く海外に出て働くチャンスをもたれますように。また　グローバル社会においては、すでに英語が世界の共通語になっている現実を考えるとき、日本の実用英語教育の必要性をこの度のグローバル都市ドバイを訪ねて、強く感じました。
ドバイは２０２０年に開催のエクスポに向って、ここに働く一人一人の違った国の人たちが、自分のこととして喜び、成功を願いながら、あれこれと熱気をもってそのプラン話すのを聞きながら、私はすでにその成功を確信しておりました。
幸いなことに、わがふるさと日本も、２０２０にオリンピックが開催されます。最近、日本からの海外留学生の全体数は急減していますが、それはここ英国でも明らかです。そうした現状を知るにつけても、オリンピックという嬉しい目標に向って、ひとりひとりが努力する準備の中に、多くの次世代が実際に役立つ英語力をつける教育が大幅に昂進されることを強く願うひとりです。
それがまた日本の文化や伝統、日本ならではのクールな魅力を知ってもらう良き機会であると共に、日本がグローバル化してゆく世界に飛躍してゆく土台になってゆくに違いないとの思いで、ドバイから帰って参りました。
追記
後で調べましたところ、ドバイに居住する日本人数は、旅行者の私には見えない所：オフィスや工事現場などマネージメントの部門で活躍しておられる日本人の方が多く、全体で約２０００人弱とのことでした。

英国春秋あれこれ

旅という言葉にはロマンが潜み、私はいつも、地図を眺めては「何処かに行きたい」と考えています。そういえば大昔、「心の旅路」という映画を観ました。グリア・ガーソンという古いスタイルの美女が出演していました。ストリーは良く覚えていませんが、確か記憶を喪失した男を愛する大恋愛物話・・・だったでしょうか。「旅愁」という映画もありましたが、私の好きな女優Ｊ．フォンティーンがナポリを旅して・・・くらいしか覚えていません。ああそれに、「望郷」（ペペ・ル・モコ）いうのもありました。がまぐちのような口をしたジャン・ギャバンの主演で、印象的な最後のシーンはよく覚えています。犯罪者として本国に連行される船上で、別の船に乗って去って行く恋人の名を呼ぶのですが“汽笛”に邪魔されて彼女には届かない。絶望した彼は隠し持ったナイフで自らの命を絶ってしまう・・・と言うドラマチックなラスト・シーン。何だか少し旅の話から逸れてしまいましたが、この映画に出て来るアルジェリアの“カスバ”は言葉自体にロマンがあるようです。若い頃は、どこか遠い外国の雑踏の中，カスバのような場所に身をおいてみたい。そしてそこで「自分は一人である」という孤独を存分に味わってみたいと思ったものでした。何とも青臭い話ですが、若かったからでしょう。今は、カスバは“危ない場所、避けたい場所”になってしまいました。そのうち、長旅に出かけねばならないでしょうがその前に、短い旅を・・・とあれこれ思う今日この頃です。

『英国春秋』　2014 年　　（No.24）
編集人　　小川のり子
発行人　　佐野圭作
発行所　　英国日本人会
事務局　　c/o　JEIB
53 New Broad St., London EC2M 1JJ

原稿の送り先　　ogawa@japanassociation.org.uk または
Mrs. M. Hodgson　492 Canterbury Way, Herts. SG1 4ED